

私だけの東京 2020に語り継ぐ



離れて見えた「量から質」



たなか・やすお
2000~06年に長野県知事。07~12年参院議員、衆院議員。「33年後のなんとなく、クリスタル」など著書多数。「サンデー毎日」に「ささやかだけど、たしかなこと。」連載中。

作家

田中康夫さん

中央線武蔵境駅南側の武蔵野赤十字病院で僕が生を受けた1956(昭和31)年は、「もはや『戦後』ではない」と旧経済企画庁の「年次経済報告(経済白書)」が記し、国際連合への日本の加盟が認められた年です。

小学1年生まで旧田無町(現西東京市)で暮らし、東京五輪開催の64年春、信州大学で教鞭を執る父親と共に家族で長野県上田市に引っ越しました。都電やトローリーバスが廃止され始め、都心の川の上に首都高速道路が出現した時期です。

その後、高校卒業まで同県松本市で過ごし、高度経済成長が一段落した75年に再び東京へ戻り、お茶の水の予備校に通います。「三丁目の夕日」的な東京を原体験に持つ僕は、「交通戦争」や光化学スモッグが社会問題化した間、信州という外側から東京を眺めていました。

ずっと東京で育っても、大学で初めて東京へ出て来ても、今

の僕はなかったでしょう。二つの異なる時間軸が、僕の物事の捉え方に直接、間接に影響しているように思えます。

国分寺と立川の頭文字を取って関東大震災後に開発された街・国立に位置する大学のキャンパスにはあまり足を運ばず、家庭教師やDJのアルバイトで忙しかつた僕は、「学園紛争」後の東京に生きる若者が主人公の小説を誰か書いてくれないかなあ、と願っていました。けれども、一向に現れません。

幸か不幸か留年し、初めて書いた小説「なんとなく、クリスタル」で80年度「文芸賞」を受賞します。「なんとなく」が気分がいいことを行動の尺度にする、都心に住む女子大生でモデルの主人公が一人称で語る作品は翌81年1月に出版され、100万部を超えるベストセラーとなりました。

体を守るために、空腹を満たすために。それが着たり食べたり

りする第一義の目的です。が、容易に達成されるようになると私たちは、体に良い味付け、好きなデザイナーの服といった、本来の目的を離れた第二義、第三義に価値を見いだそうとします。「スタイリング化」現象という高度消費社会の幕開けが1980年代でした。

選考委員として「後生、畏るべし」と過大な評価を下された文芸評論家の江藤淳さんは「田中君は、東京の都市空間が崩壊し、単なる記号の集積と化したというところを見て取り、その記号の一つ一つに丹念に注をつけるというかたちで、辛くもあの小説を社会化することに成功した」とも述べています。



神戸や京都で生まれた流行や伝統も、東京という「拡声機」を通さないと全国に広がらないと思われています。が、それはメディアが東京に集積しているからだけでなく、地勢的な側面も大きいと僕は考えています。東西に鉄道が走り、浜っかわから山っかわへと階層社会を形成している神戸。暮盤の目に道路が張り巡らされ、南から北へと緩やかな勾配を描く京都。流行も伝統も、上下左右の単純な分子運動となりがちです。

他方で東京は皇居を基点に、環状と放射状の大通りが組み合わさり、山手線の内側の都心部には曲がりくねった数多くの坂道が存在します。一例を挙げれば、麻布十番には商店街が、徒歩圏内の元麻布には邸宅が建ち並ぶように、一つの地域の中でさまざまな分子運動が活発に混じり合っているのです。東京と

いう都市の、ダイナミズムの源泉だと僕は捉えています。



多くの都民や国民が日々の生

活に追われる中、その東京で2度目のオリンピックが、17日間の日程で4年後の夏に開催されます。と同時にくしくも超少子・超高齢社会ニッポンを象徴するかのごとく、一極集中の栄華を謳歌してきた東京も2020年から人口減少社会に突入すると予測されています。

急速に限界集落化する住宅地でのコミュニティの維持をどうするか。冬季五輪という「真

の後」の財政再建と福祉の充実を、県民の協力を得て知事として行った僕の想像をも超えた深刻な事態に直面するのです。高度消費社会とは、量の拡大から質の充実へ発想と選択を転換しようというベクトルでもありました。とするなら「1億総活躍」という量の維持でなく質の深化こそ、日本そして東京の再興の力ギかもしれない。聞き手・葛西天博、写真・竹内幹



東京・銀座。大勢の観光客、買い物客であふれている表通りとは逆に、路地裏はひっそりとして静かだ。誰も来ないことを知っているのか、道の真ん中で猫がのんびり過ごしていた
—東京都中央区で、関口純撮影



@Photo